恋を討つ者

neoblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恣を討つ者

【Ｎコード】
Ｎ３８２８Ｘ

【作者名】
ｎｅｏｂｌａｃｋ

【あらすじ】
超能力者、魔術師、獣人の存在が一般的に認知されて半世紀。彼らに対抗するため術理立てられた格闘技『天羽根流柔術』は隆盛を極めていた。
その天羽根流を極める男、延治。そして広めた男、弘兼。二人は互いの天羽根流を巡り、争う。

序

二つの影が、樹間を走る。行儀よく並ぶ木材用の杉林を舞台に、二人の男が追走を繰り広げていた。

しばらくして開けた原に出ると、先行していた影の一つが奔るのを止めた。しかし何をするでもなく、直立に佇んで進むはずだった方を見据えている。

その顔を見るに、まだあどけなさの残る少年であった。先ほどまでカモシカの如く森を駆け抜けた体は伸び代を残しながらも引き締まり、半袖のシャツから覗く腕の溝は刃物で削がれたかのように深い。

少年に遅れて現れた男は、先の少年よりも体格が立派である。少年の年齢が十四、五だとすれば、男はそれに三年ほど足した年齢だろう。漸う体の発育が止まりかけ、隆々とした筋繊維を封入されていることが服を通しても窺える。

「延冶（のべや）……」

後から来た男は息を切らし切らし、苦痛に歪む顔を無遠慮に向ける。これまで走ってきたことによる疲労だけでなく、元より目の前の少年に並々ならぬ感情を持っているようだ。

延冶と呼ばわれた少年は間を置いて向き直り、自分を追ってきた男を、実に落ち着いた顔つきで眇める。自分が追われていることも、この男が自分に向けている感情も、粗方心得ているらしい。

「ここなら見つからない。やるなら今だろう、弘兼（ひろかね）」

挑みかかる口調を年長者に向け、あまつさえ突き出した右手で手招きする。

「いつから、呼び捨てになった？」

「これからはそうなる」

「天羽根流（あまばねりゅう）をやめたお前に、呼び捨てられる覚えはない」

「やめるとか、そういうことに拘るのなら、親父の技を教えてもらえばよかったじゃないか」
延治の一言に、弘兼と呼び捨てられた青年が見るからに反応する。明らかな怒気をまとった体が小刻みに震える。さらに体躯が膨らんで見えるのは気のせいではない。内圧を高めた筋肉が隆起し、ジャケットを押し上げている。
「あれは天羽根流じゃない！　あんな技、ただの、殺す技術だろうが……」
「それも武術だ。何で認めない？」
「違う！　殺さないから尊いんだ！」
弘兼の叫びが、潮引くように森へ染み渡る。双方全く譲る気はなく、頑としてにらみ合いを続ける。元よりこの議題については、常日頃から二人の意見は平行線を辿っていた。そしてもはや口にて決着されることはないという認識も、二人の間で共有されていた。

あとは二人とも申し合わせたかのように構えを取り、互いの間合いに殺気を充溢させて詰め寄っていく。
左腕を軽く下げ、右手は顎の横に置く延治は、軽やかな縦揺れのリズムを刻み、積極的に前へ踏み出していく。対して弘兼は重く腰を下ろし、両の手で球体を掻き抱くような姿勢を取っている。
間合いを詰めるのは延治ばかりで、弘兼は動く気配さえない。周囲の空気さえ固着させたように、型通りの構えを崩さない。
これまでならば彼の不動の構えに気圧されていたが、今の延治は特段に重圧らしいものを感じてはいなかった。
一度も勝てなかった兄弟子を見下ろす感覚。揺らぎなく佇む弘兼の姿が、今やただ地に張り付くことしかできない鈍物に見えてくる。
父である苑朗に手解きを受け継いだ延治の天羽根流は、もはや弘兼のそれとは一線を画している。その自信が、三年ほど年上の兄弟子を前にして一歩も退かぬ姿勢となって現れる。
とはいえ弘兼の見せる姿勢は、常から温和な彼からは想像しがた

いほどゴツく、敵意を剥き出しにしたものだ。
如何に門弟同士といえど、これほど感情を顕にして立ち合ったことなどない。ましてや奥ゆかしい性情を有する弘兼の怒る表情など、延治は今回初めて目撃したと言っても過言ではない。
何故このような所業と相成ったのか。それは延治本人にも判然としない。彼とて全く事態の中心にいたわけではなく、半ば巻き込まれたという感は今も拭えていない。しかしおぼろげながらに考えを巡らせることは出来る。
師範苑朗と他高弟との対立。若くして特に抜きん出た才を持つ弘兼と、実子延治との後継問題。そこに根ざすのは、天羽根流の教義における乖離。宗家である苑朗が脈々と受け継いできた天羽根流と、高弟たちが目指す天羽根流の食い違いが、かくして若き兄弟弟子の二人を山奥で相対させるに到ったのだろう。
事情を何とはなしにしか把握していなくとも、延治に他の高弟や弘兼を恨む気持ちはない。むしろ己の性情に正直に言えば、この事態を好んでさえいた。

兄弟子が稽古では見せない敵意を自分に向けてくれる。それで延治の心は満たされていた。さらに言えば、この戦いがもたらす経験が自分の中に染み入るのだと想像するだけで、腹の奥から衝動が沸き起こるのを止められない。
ただ自分は、天羽根流を極めたい。そのためならば、門弟同士で争うことも辞さない。
そのため煽るセリフを吐きつけたものの、延治としては弘兼を嫌ったり、疎んだりする感情はない。実力に開きを感じている今でさえ、その実力に尊敬の念を禁じえないでいる。
ただ彼に、自分の修めている天羽根流を否定されることが、延治には我慢ならなかった。だからこそ弘兼も知らない、言うなれば真の天羽根流を極めんとしている。自身の性情と目標を達せんとするため、弘兼との戦いを経験しようとしているのだ。

さらなる高みを思えばこそ、尊敬する兄弟子を詰る言葉も抵抗なく滑り出る。
「そんなに力むなよ。得意の柔法が冴えを失くすぞ」
「だったら、どうだと言うんだ？」
「俺が遠のく。ますます、な」
これ以上、好き勝手にのたまわせておくものか。怒張を増し、身も心も硬く強張らせていく弘兼の姿を、延治は堪えがたい思いで観察していた。
兄弟子である弘兼の得意とする天羽根流の柔法は柔能制剛。手を以ってせず、足を以ってせず、総身を和くして巧みゆるものである。当然、その術理の発揮には心身の弛緩が必要不可欠となる。
それが今、延治の目の前で台無しになっていく。延治の言葉に冷静さを奪われた弘兼の姿勢は、見るに忍びないほど切迫し、無様な醜態を晒している。
平素の弘兼ならば、あるいは延治も不覚を取ることがあったかもしれない。しかし今の様相では、罷り間違うことのほうが難しい。
だからこそ、奔る拳足を止められるはずもなく、延治は弘兼の至近まで詰め寄った。

一

日本の風景は、美しい。混沌としていながら、どこか朗らかで、安らぎに充ちている。もしくは、混沌としているということが単なる心象でしかなく、実は整然とした秩序と調和を内包しているのかもしれない。

東京西部の山、高尾山の中腹から景色を眺める男――サッラーム・ゴラエは秋の紅葉に染まる森を睥睨し、万感込めて息をついた。

付き従う二人の男女はサッラームの斜め後ろに甲斐甲斐しく付き従い、同じ風景を眺めている。

ただ、その姿は異様であった。

体の起伏から女と分かるほうの服装はポロシャツにズボンと、いかにも気軽な登山客らしい普通のものだが、その頭部には二つの瘤があった。黒い髪の毛に覆われたそれは周囲の何かに反応するのか、ひょこひょこと忙しなく動いている。さらに景色を見遣る瞳孔は、縦に裂けていた。

男のほうは見た目それ自体が普通ではない。服装は女のほうと変わらずに、皮膚が明らかな緑色をしている。さらには髪の毛や眉毛など、体毛は草よりも濃い深緑であった。

「これが、ニホンか。この土地では、人間と恋者との間に差別なく、争いなく、幸せに暮らしているというが……」

「実際に来られて、如何でしたか？　大臣」

猫のような女が促すと、サッラームはそれらしい思案顔を取る。彼はナミビアにて魔導大臣として、国に所属する超能力者や魔術師、獣人に関する政策を検討するため、日本に訪れていた。

「まあ、今のは持ち上げ過ぎだな。やはり差別はあるし、争いもある。だが、決定的な対立はない。営みの揺らぎとして、そうしたものがある。だからこそ素晴らしい」

そのとき、一人に登山客がふらりと登ってきた。サッラームと緑色の男それぞれにぺこりと頭を下げながら、前の道を通ろうとして――

「ぐごっ」

二人の耳を突いたのは、不気味な声だった。間近で観察していたはずの二人は、それがサッラームの喉から漏れたのだと分かるのに数秒を有した。

それほど気さくに、何気なく、その登山客は人間の喉を二本の指で挟み、引き千切ってみせた。

挨拶するように近づいてから喉を潰すまで、二秒と経っていない。

「大臣！」

叫ぶよりも前に、緑色の男の体は戦闘態勢に入っていた。単に構えたということだけではない。泡のように筋骨が盛り上がり、胴の辺りがずるりと伸びていく。

その瞬間、登山客が動いた。異常極まる事態にも動揺した様子なく、サッラームの死体を女へ投げつけ、そのまま緑色の男へと踏み出す。

右足で踏み出し、その動きに逆らうことなく、するりと右手が前に出る。むしろ差し伸べるような自然さで、登山客の手が男の腹へと吸い込まれる。

液が、土の上に滴る。周りの草より濃い、暗緑色の雫である。

貫手が臓器を伴って、背面から飛び出している。臓器も緑に近いらしく、アボガドの皮のようなものが幾つも連なる。

「柔い。まるで蛹だ」

ぽつりと、その登山客が呟いた。

手を戻し様、背骨を掴んで一緒に引き抜く。ごろりと大きい腰椎骨を握り潰し、喘ぎながら蹲ろうとする緑色の男の脳天を思い切り踏み砕いた。

緑の血がばしゃりと広がり、身の毛もよだつ痙攣が続く。その間も緑色の男は変身を進め、下半身が完全に蛇の様相となったころ、その動きは停止した。

一部始終を見入る猫目の女は、飛び出しかねていた。本来なら自分の雇い主と同僚を殺害したこの男を早急に逮捕すべきなのだが、体が前に出てくれない。

雇い主であるサッラームが殺された時点で彼女はボディガードの役目を果たせていないのだが、お役御免とはいかない。目の前で起こった殺人を見逃す正当性もまた在り得ない。

「シャアアアアアア！」

細く長い擦過音のような呼気を吐いて、猫目の女もまた姿を変容させていく。とはいえそれは緑色の男ほど顕著ではない。爪と牙が見る間に伸び、足や手の関節が歪に成長し、四足で蹲るのに適した長さになっただけだった。

すん、と男は鼻を鳴らし、目深に被った帽子の下から女を見下ろす。

「アダンダラ、というやつか。猫を女にするのは、どこも同じらしい」

そこで初めて登山客は、構えらしきものを取った。

左手を中段の半端な位置に置いて前に出し、右手は軽く握って顎の下にゆったりと付けている、何とも半端な構えだ。

登山客が構え終えるか否かという時点で、女は登山客めがけて飛び出していた。変身したことで筋量の増した大腿が、はちきれんばかりに力み、一気に伸展する。踏み固められた登山道の土を大きく抉り、引き絞られた矢そのものの勢いで全身が飛打ち出される。

女が踏み出すのと同時して、登山客は僅かに身を屈めながらすいと前に出る。そして女の突進を見抜いたかのように、彼女の動線と重なる形で右の貫手を突き出した。

飛び出す動きを盗まれての貫手は、もはや女が気がついたとき、

既に目の前へと迫っていた。その速度自体は、女の突進のの半分に満たないだろう。それでも寸分の機も逸さぬ絶妙の打突は猫人と化した女へ近づき――その頭上へと逸れていった。

外れた。そう女が確信し、隙を逃すまいと更に踏み込んだとき、自分の頭の上のほうから、どことなく嫌な音が聞こえた。

ぐじりと、柔い肉が押し潰れる音が、自分の耳から間近に聞こえる。というよりも、その音の発生源がまさに自分の耳なのだ。

猫女が声も上げられずに痙攣を繰り返すなか、耳に指を突っ込みながら、登山客は彼女の頭部を鷲掴みにして固定する。耳孔に指を入れられた衝撃に震えている間にその開いた顎をも右手で捕獲し、鶏を屠殺する無慈悲さと手際の良さで両の手をぐるりと回す。

二百七十度近く捻転した女の首は急激なねじれに耐え切れず、皮膚がぶちぶちと裂け千切れる。そこへさらに右の腕刀を振り下ろし、女の頭を地面に叩き付けた。勢いよく飛沫を上げる赤々とした血が緑色の血と混ざり、どどめ色となって登山道の脇から滴り落ちていく。

時間にして一分足らず。靴についた赤と緑の血を払うと、男は登山道から離れ、藪の中へと飛び込んでいった。

二

喉から喘鳴がする。心臓が肋骨を叩いているのが分かる。こんな山登りをするために、自分は刑事になったわけではないのだが、現実はどこまでも彼女に厳しい。

前を歩く相棒の背中を恨めしく思い始めたころ、マホリ・ハルスターは現場に到着した。

中腹の休憩場に張り巡らされている立ち入り禁止のテープを潜り、事件が起こったその場を見渡す。

この瞬間が、マホリは一番好きだった。緊張と焦燥と怒りと使命感。それらが綯い交ぜとなった空気を自分の力で感じ取ったそのとき、彼女の高揚は確実に刺激される。

マホリは身に着けていた厚手の皮手袋を外し、地面に滴った血の跡や足跡、それに死体自体にも手を伸ばす。

「どうだ、マホリ」

マホリと一緒にやってきた男は、その巨体を聳やかしながら訊ねた。彼はその太い指に白絹の手袋を通し、掌に収まってしまうメモ帳にせこせこと記載している。

「これをやった奴は素手よ」

それ以上の反駁を許さぬ強い言い切り様で、マホリが断定した。その声に他の捜査員も動きを止めて注目するが、彼女はそんなことも気にせず、さらに被害者たちの体を触り続ける。

「サイコメトリーでも読み取れないところがある。精神防壁を徹底してる。相当な訓練を受けてる……」

うわ言のように呟くマホリの言葉を、亜砂が素早く書き取っていく。

通常、捜査官が証拠品に素手で触れるようなことはない。指紋などの採取が困難になるからである。しかしマホリの場合、特例的に

素手で証拠品や現場を回ることをむしろ義務付けられていた。
マホリが行なっているのは、サイコメトリーと呼ばれる超能力である。対象に触れることであらゆる情報を取り出すことを可能とする。

昨今、こうした超能力を有する人材は珍しくない。
二千年――今から五十年前に行なわれたある宣言を境に、そうした人間の存在が明るみになった。マホリのような超能力を発現させた者や、サッラームのボディガードのように異形へと変貌する獣人。さらには魔法と称すべき術を振るう者まで現れた。
そうした者たちが、今は社会の営みの中で存分に力を用いて活躍している。
粗方のサイコメトリーを終えたマホリは、ハンカチで手についた汚れを拭いながら立ち上がった。
「これをやった相手、人間よ」
「お前、さっきは素手だと言ったじゃないか」
「素手の人間という意味よ。一人の、ね」
すげなく言ったマホリの冷静さに反して、大柄な男――亜砂が大げさに目を見張る。
「彼らだってボディガードだ。素手の人間に倒せるようなものじゃない」
亜砂の言い分に付き合わず、マホリは自論を継ぐ。
「ボディガード二人の心情は、死ぬ瞬間まで強い苦渋と混乱に満ちている。何も納得のいかないまま死んでる。受け入れがたい理不尽を、死んでも残してる」
少々声を上擦らせて話すマホリの顔には、薄ら笑いが張り付いていた。まるで自分が開陳している知識を、下賤な者に分け与えているのだと言わんばかりの冷然とした顔つきだ。
「こういう理不尽を、私も知ってるわ。例えば普通の人間に、徹底的に打ちのめされたときとかね」

押し黙る亜砂にも、マホリの言い分に思い当たるところがあった。
「恣者（アロガンス）は、多かれ少なかれ選民思想というか、妙にプライドが高いから、ただの人間と戦って負けるなんて屈辱以外に感じないはず」
自らもその恣者でありながら、それを棚に上げた言い様を平然としてのける。むしろそうした態度こそが妙なプライドの高さの裏づけであるかのようだ。

恣者とは、いわゆる超能力者や魔術師などの、人間とは思えぬ力を行使する者の総称であり、蔑称である。実際、生物学的に人間とは言いがたい者も存在するが、魔術師や超能力者の多くは生物学的には人間であるため、何も異なった部分は存在しない。
最近ではサイボーグやアンドロイドに対してもこの用語が用いられるが、本邦では差別用語とされ、放送局でも神経質なまでに規制されている。
もはや用はないとばかりに、現場に着いてから十分と経たずマホリはそそくさと登山道を下り始めてしまった。相棒の勝手な振る舞いに亜砂は何も言わず、巨体を窮屈そうに屈めてテープの下を潜り出た。
「相変わらず、まともに検分しないな」
「だらだらしてたら取り逃がす。捜査は速度よ。それに……」
マホリは携帯を取り出し、漫ろな調子で顔も見せずに言う。
「証拠は幾らでも残ってる。まともな捜査は、まともな連中に任せればいい」
大振りな手で亜砂がくしゃりと自分の頭を撫でると、側頭よりも上に生えた耳をはねつけた。何か言いたげに口をむずがっているが、結局はただ一言、これからの予定をマホリに聞いただけだった。
「羽牧師範に話を聞きに行きましょう」
確かに亜砂にとっても、その提案は腑に落ちるところがあった。何の異能力も有さない普通の人間が、訓練された獣人を制圧してのける可能性を論ずるのに、羽牧師範なる人物を置いておくわけには

いかなかった。
「まさか、疑ってるのか」
さらに言えば、そんな芸当が可能な人間として、羽牧が有力だということになる。
「助言をいただくだけよ。どうすれば素手の人間が、獣人のボディガード二人を倒せてしまうのか」
羽牧は、現在警視庁にて逮捕術の指導を行なっている武道家である。時として魔術や超能力を犯罪に使う凶悪犯を捕まえる警察官が、いかにして迅速かつ安全に恣者を制圧するか。彼の流派は、そうしたことを突き詰めた技術体系であった。

いわゆる対恣者戦闘術を学んだ、単なる人間の行為――
今でもそれを否定する声は、マホリの中でも上がっていた。そんな馬鹿なことがあるかと、常識でものを考えろと責め立てる。
そんなものは、他の声に掻き消される。
誰もこんな結論には辿り付かない。誰もこれを、魔術も超能力も持たない人間の仕業だとは思わない。
出し抜ける。自分だけが、先んずる。
冷静さを喚起する言葉なぞ、興奮の前では淡雪同然だ。まるで宝の地図を見つけた気分に、マホリは遠慮なく浸っていた。犯罪行為を取り締まる警察官にあるまじき思考も気にならない。
この機を逃すなと、自分が自分を急かす。
犯人は必ず自分が挙げる。自分が持っている力は、こんなところでくすぶるようなものではない。

だが、決め手が無いのも事実だった。
結果が見えているのに、過程がまるで見えていなかった。普段ならばより鮮明に見透かせるはずなのだが、犯人のほうが精神的に防壁を築いているらしく、サイコメトリーによって取り出せる情報が少ないのだ。

普通の人間だとしても、そのようなことは不可能ではない。精神の在り様を強固に保つこと――つまりそれは精神的な防壁となり、魔術的、あるいは超能力的な干渉を退ける。しかし、サイコメトリーの読み取りを妨害するほどのものとなると、マホリにさえ想像がつかなかった。

それでも、今は関係ない。全ては犯人を挙げてから考えればいいことなのだから。

三

高尾山から青梅方面に進み、手前の小作に羽牧の道場がある。巨大な敷地に寮や道場を備えた、まるで学校施設のような場所である。

この道場を見ただけでも、羽牧の流派――天羽根流がどれほどの隆盛を誇っているかが窺える。この本道場の他に東京だけでも八王子と新宿にそれぞれ道場がある。その他に派生した流派の道場も入れれば、その数は計り知れない。

守衛に警察手帳を見せ、中の駐車場にパトカーを止める。この道場には亜砂もマホリも訪れたことがあるので、勝手を知っていた。

最も大きい第一道場からは、気合の声や受身の音が威勢良く響いている。恐らくは乱取りの最中なのだろう。

天羽根流は一応、古流柔術という分類なのだが、世界中の格闘技や武術の要素を取り入れることに対して非常に積極的で、練習方法も型稽古だけでなく組み打ちや乱取りを重視している。

入り口から眺めてみると、やはり乱取りを行なっていた。四二〇畳もの敷地に所狭しと門下生がひしめいている。

中には明らかに体躯が人間とかけ離れたものもいる。天羽根流以外で、こうした風景はまずお目にかかれない。

恣者による格闘技や競技への参加は、多くの場合に制限されている。魔術や超能力、そして獣人といったいわゆる恣者の力は、物理法則さえ捻じ曲げるほど甚大なため、単なる人間と競い合うことがそもそもナンセンスになってしまう。

そんななかで天羽根流は、恣者の参加を全く制限していない。能力の制限も他の競技に比べれば緩いため、恣者の門下生が非常に多い。

それがこの隆盛の一因でもある。そして恣者の門下生が多くいるからこそ、恣者の力に対抗する戦術が多く考案され、日本だけでな

く世界中の警察機構や国軍の指導に反映されている。亜砂やマホリも、ここで指導を受けたことが何度かあった。
入り口で所在無さげに佇んでいると、一人の老人が彼らに気がついてくれたようで、眩いばかりに禿げた頭頂をタオルで拭いながら近づいてくる。
「おやあ、マホリさんに亜砂さんじゃないか。今日は稽古の日取りじゃなかろう」
牛の獣人である亜砂に互するほどの体格は、無論単なる人間のものではない。
老人の名は巨瀬野九千（こせのきゅうぜん）という。天羽根流の師範代であり、河童の獣人でもある。本人は平家の落人で有名な九州は筑後の出身で、大陸から来た九千坊の子孫だの、平清盛の変化した巨瀬入道の血筋だのと嘯いている。
「今日は羽牧師範にお話を窺いたくて来ました。こちらに居られますか？」
「若先生かい？　少し前に成田に着いたと連絡が来たから、まだ掛かるだろうねえ」
「どこか出張に行ってらしたのですか？」
「おとついからインドの道場へ指導に行ってたんだ。また新しい道場を建てたから」
「それじゃあ、見学して待たせてもらってもよろしいですか？」
「ああ、構わないよ。何なら稽古していくかい？」
「いえ、今日は遠慮しておきます」
亜砂と巨瀬野が話を進める間、マホリは押し黙って道場の様子を見入っていた。
いつ訪れても、その規模に呆れる思いを抱く。四二〇畳の広さは、道場というより会館だ。その内装の全ては、強力な能力行使に耐えられるよう、魔導技術者に作らせた特注品だという。単なる畳にしか見えない床は、高温の炎やレーザー光線さえ魔術的防壁によって遮断する。壁や天井も同じような作りとなっている。

ここまで整備された屋内施設は、世界でも数少ない。アメリカの魔導技術研究所《ＭＴＯ》や、イギリスの心霊研究協会《ＳＰＲ》などの研究機関も所有しているが、それは恣者などに対する研究実験が目的だ。天羽根流のように、ただの訓練のために用いることはない。

このことからも、天羽根流という柔術の一流派がどれほど繁栄しているかが窺える。

天羽根流が一躍有名になったのは、羽牧より一代前の師範にして彼の義理の父親である羽牧苑朗の活動によるところが大きい。彼は迫害や差別の対象になりやすい恣者と、彼らからしてみれば何の力も持たない人間との融和を積極的に説き、自ら世界中を遍歴する中で多くの恣者と戦い、互いに認め合い、競い合うことの大切さを説いたという。

その活動を、恣者の中でも有力な貴族であるデオス家が支援した。家中の者を門下に加えさせ、段位を取らせ、恣者へ天羽根流の素晴らしさを広めていった。

それはほどなく世界的なムーブメントとなり、天羽根流を身に着けておくことが上流階級の間での嗜みとして扱われるまでになっていった。

苑朗のそうした活動が日本における恣者と人間との融和に大きく貢献したとして、彼は五十八歳のときに国民栄誉賞と文化功労賞、翌年には人間国宝に選定されている。

影響力を強めた天羽根流は、世界各国に師範代を派遣し、そこに道場を建てていった。

苑朗から代を変え、弘兼が師範になると、彼は天羽根流の競技化を推し進め、体重や能力などで細かに分類し、その中で存分に力を発揮できるような環境を整備した。これはエンターテイメントとしても成功し、上流階級だけでなく、多くの人に受け入れやすい天羽

根流を形作っていった。
　また、これまで天羽根流が培ったノウハウは貧困層にこそ必要だとして、発展途上国や貧困国にも積極的に道場を建てていった。
　例えばタイなどでは、貧困層の子供が幼少の頃よりムエタイを習うように、恣者の子供が天羽根流の組んだ試合に参加する構図が出来上がりつつある。通常の格闘技では競技の純性を欠くとして出場も許されない恣者だが、天羽根流にそのような差別的要素は無い。彼らが稼ぐには天羽根流が主催する大会で良い成績を残すことが近道なのだ。
　そのシステム作りも秀逸だが、無論それだけでは世界的に受け入れられることはなかっただろう。まず武術として、そして恣者に対する自衛の手段として、天羽根流は優れていた。

　それは習っているマホリも身に沁みて感じるところである。
「若先生、おかえりなさい！」
　門下生の一人が挙げた言葉に、皆が入り口を振り返った。
　立っていたのは、一人の精悍な男だった。水色のポロシャツから覗く浅黒に焼けた肌が逞しい。とはいえ、その体格や見た目は人間そのものである。
　この男が世界百二十カ国に支部道場を千箇所以上抱え、門下生二千万人を擁する一大流派の頂点、天羽根流現当主の羽牧弘兼である。
「インドはどうでした、若先生」
「大変でしたよ。道場を建てるところに古い神殿が建っていたようで、地元の宗教グループと揉めてしまいました」
　ともすれば優い印象の羽牧は道場の中を見渡して、荷物を端に置いて準備運動を始めた。疲れを一切感じさせないキレが動作の一つ一つに現れている。
「さて、少し組み手をやろうか」
　帰ってきて早々、弘兼はそのようなことを言い出した。
　弘兼自身がまだ二十八と若いこともあってか、師範だからと言っ

て偉ぶったりすることはなく、その段位に関わらず門下生と組み手乱取りを行なうことは珍しくなかった。マホリも逮捕術の指導の際に弘兼と直接に乱取りを行なったことがある。そのときのことを思い出し、彼女は少しばかり身を震わせた。

ほどなく一人が手を上げ、羽牧の前に立つ。彼のことはマホリも知っていた。天羽根流の中目録を取っている陰陽師、賀茂栄修である。

「神前に、礼！」

審判の位置に立った巨瀬野が野太い声を張り上げる。道場の壁に備えてある神棚に向かって、二人が頭を下げる。

「お互いに、礼！」

今度は互いに向き合い、礼を拝する。

世界中に広まりつつある天羽根流だが、その流儀はあくまで日本式である。このように日本文化を世界に対して深く浸透させたという実績も、天羽根流が評価される一因だ。

「始め！」

掛け声を受けて、羽牧がゆるりと構える。右足を前に出して自然と斜に体を向け、両の手がふわりと持ち上がる。右手が上に、左手は下に、まるで両の手で胸の前に球を抱えているような仕草。

天羽根流、円（つぶら）の型。柔なる技を旨とする構えである。

四

対して賀茂は手に符と呼ばれる紙を幾つか携え、両掌を相手に向けて前に出す。空手で言うところの前羽の構えと言えなくもない。天羽根流は多くの武術から色々な要素を取り入れているため、他の格闘技や流派の技を積極的に使う。

すいと、弘兼の足が僅かに上がる。ただそれだけのことで「おおっ」というどよめきが道場を一巡する。

これも特段に珍しい事態ではない。師範である弘兼の術理は、ただ足を挙げ、踏み出すという一動作にさえ充ち満ちている。それを解明し、己がものとするため、門下生たちは彼の一挙手一投足から目を離さないでいる。

上げた足が、つ、つと、少しずつ間合いを殺してゆく。ただただ摺り足で進んでいるようにしか見えない動作を重ねるうちに、いつのまにやら相手との間合いがもはや一足一刀の近さまで詰まっていた。

そんな彼らでさえも分からぬうちに、やや左に回りこみながら一跳びに踏み込んだ羽牧が、陰陽師へ切迫する。

ぶるりと、マホリも身を震わせる。彼女とて一瞬たりとも目を逸らしてはいない。他の門下生はそれ以上の必死さで臨んでいたことだろう。それでも、如何様にして懐を取ってみせたのか、まるで知れない接近であった。

接近を悟らせない。悟らせても距離を見誤らせる、油断させるということに関して、羽牧の腐心は計り知れない。傍目にさえ窺い知れないのだから、目の前で被った相手の動揺はそれ以上だろう。

賀茂はぎょっとしながらも後ろに跳び、広げていた右手を振り下ろした。その指に挟まれていた符が、投げ放たれる。

「赫炎灼火、急々如律令勅！」

素早く紡がれた口訣を受けて、投げられた符は空中で燃え上がりながら爆発的な勢いで広がる。
恣者に対抗する武術を恣者が使い、その術を繰りながら異能力を行使する。これもまた、恣者を受け入れた天羽根流の姿だった。

弘兼は迫り来る火炎を前にして退きもせず、むしろ果敢に前へ出る。天羽根流の教えから行けば、本来このような行いは避けられるべきである。異能力の行使を真っ向から受け止めるなど、同じ恣者同士でさえ愚かしいことだ。それが通常の人間であるならば自殺願望と受け取られても仕方はない。
しかしこと天羽根流師範に、その薫陶は当てはまらない。
弘兼は脱ぎ払った上着を振り回し、爆炎を絡め取り、逸らしながら突進する。炎の真っ只中を最短距離で駆け抜け、再び陰陽師の前に現れる。
炎さえ逸らしてみせる中国拳法で言うところの化勁の技術は、武術に関して分別のない天羽根流も取り入れている。

異能力を由来として生み出された現象は、通常の現象とは性質を逸しており、より強く能力者の恣意を顕すようになっている。炎で言うならば、燃え方や延焼の仕方などに、ある程度頭に思い描いたものが反映される。炎の操縦に特化した恣者の中には、氷の中に炎を灯し、かつ氷を僅かばかりも溶かさぬほどその性質を操り、押さえ込める達者もいる。
恣意性の反映は、恣者の実力を測る一つの目安となっている。自分の思い描くものを顕すことは、種々様々は恣者に共通する力とも言える。しかしその恣意性は、当人にとって良い方に働くばかりとは限らない。
服を持って炎を逸らす動作は、本当に炎熱を避ける意味が半分。もう半分は相手に逸らしていることを見せているのだ。
恣意性が十二分に発揮されたなら、物理的な逸らしなど何の意味

も持たないが、実際に炎は弘兼の腕に引き込まれるようにして外れていく。
これは瞬時に発揮される無意識下での認識が、恣意性として発露してしまっているためだ。
まるで逸らされているのだと感じてしまい、瞬間に湧き上がる無意識が恣意性として顕れ、炎が相手から逸れていくことになる。非常に刹那的なことだが、本来自分の思うがままに操るという意味の恣意性が、自分の意思を離れてしまう僅かな間が存在する。
弘兼はその瞬間を用い、魔術的炎熱を防いでみせた。

再び符を放つ陰陽師だが、既にそこは弘兼にとって一足一刀の間合いであった。
投げ放たれ、発動する寸前の符を、素早く伸ばした手が握りつぶす。符はあくまで魔力を込めた紙切れに過ぎず、魔術的な意味を発する前に破いたり潰してしまえば、その力ごと霧散する。
符を潰した手を戻さず、背刀は顎、掌は胸、さらに膝は股間へ、それぞれぴたりと添えられていた。
「それまで！」
巨瀬野が仕切りの声を上げ、二人が開始線に戻って礼をする。
別段、天羽根流は寸止めの流儀を持っているわけではなく、むしろ直接打撃制を取り入れている。ただ先ほどのように決着の明らかな場合にはあえて打たずとも、審判の判断で止めの声が掛かるようになっている。
門下生たちが感心の声を上げるなかで、マホリはその顔をさらにしかめ、半ば睨みつけるように弘兼を見つめていた。
あれだけ的確な振る舞いは、例えサイコメトリーを持っているマホリでも無理だ。未来を見通す千里眼や予言者でさえ出来ないだろう。天羽根流を身に付けた者にしか、あんな芸当は行なえない。
とはいえこれが如何なる魔術も超能力も持たず、獣人のように体を、あるいはその一部を変容させることさえ出来ない人間の仕業な

のだと確かめるたび、マホリは自身の中にぐうと蟠るものを感じていた。

天羽根流の優れていることは、マホリも認めるところである。しかしその現象は、マホリの精神と真っ向から対峙するような気がしていた。どこかは分からないが、自分の芯らしきものが揺らぐような気になってしまうのだ。

認めはするが、受け入れがたい。正直、恣者として本気で天羽根流に打ち込む者の精神構造は、マホリにとって理解の埒外であった

五

「次！」
弘兼の威勢良い声を受けて、また一人の男が前にです。
「お願いします！」
金髪碧眼の男は流暢な日本語で気合の声を上げる。その容貌から察するとおり、彼は生粋の西洋人。それもマホリが聞いたところによれば、近代西洋魔術の本場ギリシャから、わざわざ天羽根流を学ぶために移住してきたのだという。
彼はワント・ワイズマンと言い、精霊使役に秀でた魔術師である。四大精霊の組み合わせによる汎用性の高い魔術行使は、格式高い近代西洋魔術の規矩と言える。

二人の礼が済むと、巨瀬野が始めの声を掛ける。
「初めっ！」
すぐさま男は両手を目の位置まで上げて構える。ボクシングで言うところのアッパライトスタイルである。こうしたものも天羽根流は取り入れているので、天羽根流の組み手としては見慣れた光景である。弘兼のほうがゆらりと腕を泳がせ、またも円の型を取る。
「せやっ！」
構えて早々、男の気合と共にその体が爆発した――そのように知覚されるほど、男が勢いよく飛び出したのだ。
ごおっと風を巻いて驀進する男の横を、するりと回りこんで弘兼がやり過ごす。男の巻き起こした風が脇に座る者たちのところまで届く。
この攻防だけでも尋常ではない。ワントは近代西洋魔術における四大精霊の扱いに長けており、今の突撃は風の精霊であるシルフェの力を背面に集中させて、自分の体を発射させたのだ。速度の程で言えば時速九十から百キロメートルほど。電車に近しい速度である。

無論、単純に衝突するだけでもただでは済まない。

それを弘兼は、なんともゆるりとした体捌きでいなしてしまった。

「このように、物理干渉を可能とする術や能力は、逆に物理干渉を許してしまうケースがあります」

その体捌きと同じだけ淀みなく、滔々とした説明口調で弘兼は補足する。今度の立ち合いは説明付きらしい。

「先ほどの突進ですが、かように人間の身体能力を逸脱する場合、魔術師の多くが無意識的に体に何らかの防護を敷きます。ワントさんの場合、突進に使ったのと同じ風を纏うことで、自身への負担を減らしていましたね」

子供に言い聞かせるような、噛んで含ませる声。

「その防護を押すことで相手の体をずらせば、自然と軌道は逸れていきます」

弘兼が説明している間に、ワントは突進の勢いを殺さず、そのまま空中に舞い上がっていた。

いわゆるレビテーションという現象である。魔術師だけでなく、超能力者にもこのような現象を可能とする者は多い。恐らくは突撃に用いたシルフェの風によって体を浮かしているのだろう。

「開け目よ。さすれば扉は開け、汝は精神（ノース）を垣間見る。聖なる質を取り込み、目を光に釘付けるがよい。煌々と照らされし小径に、其の大霊を凝視せよ」

呪文の詠唱を済ませると、ワントの右手に炎が、右手に紫電が蟠る。しかし弘兼は気にした風もなく、空中に浮かぶワントを漫然と眺めている。

「前提として魔術師を相手取る際、重要なのは先手を取るということです。力を発揮するのに呪文や結界、魔方陣などを必要とする魔術は、発動するまでが隙となります。そこを突くのがもっとも効果的ですね」

先手を取ると言いながら、そんな素振りを見せない。まるで予め

先手を取っているのだと言わんばかりの余裕で、弘兼は門下生たちへの説明を続ける。
「しかし、予め体に霊的記号を身につけたり、自然な動作の中に魔術的恣意を持たせるなどして、発動までの時間を大幅に短縮する技術もまた存在します」
魔術というのはあくまで術と称するように、れっきとした技術体系が存在する。然るべき知識を備え、定められた手順を踏むことで、理論上はいかなる人間であろうと行使することが出来るのが魔術である。その辺りが、当人の資質に由来する超能力者や獣人とは大きく異なる点である。

とはいえ、魔術で言うところの然るべき知識というのは、常人には理解し得ない類が多く、ときには知り得ただけで発狂する場合もある。そして定められた手順というものが往々にして煩瑣であり複雑なため、万人に開かれている魔術を人生を賭してまで学ぼうと覚悟する人間というのは存外に希少である。
身に付けることが至難であるだけに、魔術を備えた者は、およそ不可能という事項が見当たらないほど汎用に富んだ力を発揮できる。ワントのように四大精霊を使役するだけでも、火水風土に関わる全てを隷属させていると言っても過言ではないため、体を浮かすほど強烈な風を発しながら、掌中に火や雷を宿すといった芸当を可能とする。
「では、発動してしまった魔術には、如何にして処するべきか。高原さん」
呼ばわれた門下生は威勢良く返事をして、同じ調子で元気に答えた。
「はい。まずは逃げることが大事だと思われます」
そう言っている最中にも、弘兼の周りには炎や雷が迸っている。空中から一方的に、ワントは両掌から炎と雷を交互に投げ落とす。
「そうですね。強力な術や能力の行使を真っ向から受け止めるのは、

得策ではありません」
柔らかく諭すように語る間、ワントから放たれる炎雷に些かの緩みはない。魔術的工芸によってあらゆる異能力を遮断する畳が、今にも割れんばかりに揺れている。
しかし、当の弘兼には掠りもしない。よしんば袖の端を焦がす程度である。傍目から見れば弘兼に当たらぬよう、ワントが細心の注意を払って攻撃を行なっているとしか映らない。

無論、申し合わせているわけではない。同じ門下として幾度も手を合わせていることを鑑みても異様な光景である。
師範である以上、門下生の特徴や癖は微に入り細を穿つまで心得ているのだろう。だとしても、これほど戦いを制御できることは驚嘆に値する。
いつ見ても魔術か超能力にしか見えない。だが彼はそうしたものを全く身につけていない。高度な科学が魔術にしか見えないように、高度な武術もまた魔術や超能力と大差がないのかもしれない。
超能力的、あるいは魔術的な手段で生み出したものというのは、自然に発生したそれとは性質を逸している。雷を例にとって見れば、通常ならばより導電性の高いほうへと流れる傾向を持つのに対し、魔術的な雷は近くにある導電性物質などお構いなしに、術者の定めた軌跡と位置を忠実になぞる。
つまりは術者の認識をごまかしたり、上回ることが出来れば、回避することは決して不可能ではない。
ひたすら炎と雷を空中から投げ込むという無謀な攻めを強いられていたワントが、一際大きく振りかぶって炎を投げ落とした。
堂内を揺らす轟音と噴煙で、辺りの見通しは一時的に最悪となる。次の瞬間に門下生たちが目にしたのは、煙の中から上方へ飛び出す弘兼の姿だった。
壁を蹴り、三角跳びの要領で飛んだのだろう。完全にワイトの背後を取っているため、彼は気づく様子も無い。そこへ音もなく近づ

く弘兼が、後ろからワイトを抱きすくめた。
いきなり飛びつかれ、浮いていたワイトがぐらりと揺れたのは一瞬のこと。すぐに彼は落ち葉の如く力を無くした様子で床に叩きつけられた。

弘兼に抱きすくめられた時点で、ワイトは首を絞められ、失神していた。そうなれば魔術師は普通の人間と大差ない。焦りが高まるのを待ち、僅かな隙を突いて接近、迅速に制圧。まさに手本となる対魔術師戦闘である。
背を押して気付けをすると、ワイトは我に返って悔しそうな面持ちになったものの、すぐに気を持ち直して清々とした顔で弘兼と互いに礼をした。すぐさま敗北を察し、自制の心でそれを押し飲んだのだ。
尋常の魔術師ならば、このような振る舞いは期待できないだろう。単なる人間に気絶せしめられるなど、森羅万象に通じ普遍の真理を探究する彼らにとって、在り得ざる瑕疵なのだ。
存外とそのような振る舞いこそ、人の感性や行動を規定してしまう。人外の知識をその頭脳に収めたる魔術師は、総じて森羅万象への崇高な探求の徒である。およそ社会通念からは大きく逸脱した情熱と手段でもって魔の知識を求め、魔の術を操る。そうして有史以来積み重ねてきた魔道に連なる者が、ある種の貴族的嗜好を身に付けることは珍しくなく、実際に近代西洋魔術の派閥には爵位を持つ者が多い。

殊勝で低頭な魔術師というのはそれだけで異常なのだが、天羽根流の中では罷り通っている。
自身は魔術師ではないものの、この世の中、魔術師の知り合いなど嫌でも出来る。絵に描いたように傲慢な連中と交友のあるマホリは弘兼師範に首を垂れる恣者を見るたび、虫の居所が途端に悪くなってしまう。

どこか世の理が齟齬を起こしているような、途方もないむず痒さ。人間が魔術や超能力に対抗するための術を研究するということ自体に、詐称か偽善らしきものを感じずには居られない。

魔術師ほどではないにしろ、超能力者という人種も似たり寄ったりの生態を有している。同じ恣者が倒される様というのは、あまり気持ちのいいものではない。

「神前に、礼！」

改めて審判の巨瀬野が声を上げ、ワントが下がると、今度は全員で型稽古を始めた。

六

前に立つ弘兼に合わせて、五十人近い門下生が一糸乱れぬ統率で型を消化していく。ついでにと参加している亜砂に対して、マホリは邪魔にならぬよう端に寄って稽古を眺めている。

およそ格闘技の習練としては珍しくもない光景だが、中には亜砂のように体躯が人のそれを上回っていたり、鱗や角まで生やしている者もいる。そして見た目には分からないが、ワントのように魔術を修めた者も、マホリのように超能力を身に付けた者も、一緒になって稽古をしている。

その気持ちも、分からなくはない。

天羽根流は今や一格闘技、一流派ではなく、恣者に対抗するための総合的な技術体系と言えるだろう。恐らくそれは魔術より、超能力より、獣化より適当である。

超常の力に超常の力で対抗出来るならそれに越したことはないのだが、常にそれが相手に通用するとも限らない。魔術であれば星辰や地理などに大きく左右されることもある。超能力や獣化もノーリスクとはいかない。上記の二つの場合は魔術に比べて力の発現が限定的であり、汎用性が低いのが常であるため、敵方との相性によっては手も足も出ることなく敗北することも、当然のように想定できる事態だ。

その点、天羽根流は超常の力を前提としていない。応用として組み合わせる者もいるが、それが本来ではない。五体のみを条件とした技術体系を高い次元で身に付けたならば、魔術的条件や敵恣者との相性に左右されず効果を発揮する。

つまるところ、恣者でさえ、恣者が怖いのだ。むしろ人間以上の力を備えた自身が不覚と取るとすれば、同じ力を持った者だと認識

しているのが多数だろう。そこがまた、天羽根流の隆盛を支えていると言えなくもない。特に師範である弘兼は恣者の抱く油断や慢心という心理を、えげつないまでに煽り立てて突き崩す。
一見して優く柔和な印象が、単なる人間であることに加えて相手の油断を引き出し、構えから気配から戦い方まで一切の殺気を断ち、柔らかく包み込むような優しさを徹底して纏うことで、敵対してなお安心させてしまうのだ。
そうして捻出したゼロコンマ一秒の鈍りを積み重ねて初めて、只人の身で恣者を制圧するという大業が完成する。

稽古が終わるのを見計らって、亜砂が媚びるように張り付いた笑みを浮かべながら弘兼に話しかけた。
「いつもお世話になっています。先生」
亜砂に気づくと、弘兼も人の良さそうな顔をころりと綻ばせて微笑みかける。
「マホリさんに亜砂さん。今日は見学してたんですか？」
「ええ、少しお話を聞きたくてですね」
亜砂がにこやかさを保ったまま言うのを受けて、弘兼が少しばかり首を傾げる。その仕草は何とも可愛げを有しており、彼が三十路手前であることを疑わせるほど稚気に充ちていた。
警察に話があると言われて、動揺しないほうが珍しいだろう。しかし弘兼は表情を崩さず受け止めている。
「それで、聞きたいことというのは？」
弘兼が促すと、今度はマホリがすっと前に出た。
「素手の、単なる人間が、訓練された獣人を倒すことは可能ですか？」
マホリの問いに弘兼はにこりと笑い、
「可能です」

と、即答した。

恣者との武を通した融和を目指してきた流派の師範である以上、そのように言うしかないだろう。それに弘兼は、先ほど門下の恣者を制したばかりだ。彼の吐く言葉から嘘や躊躇いの色を窺うことは出来ない。

しかしマホリは、まだ疑いの念を払えないでいた。

そも出場や能力の使用自体を禁止しているほかの格闘技と違うまでも、天羽根流も恣者に対する制限を設けている。

例えば浮遊する場合、足が三メートル以上地面を離れれば失格か、あるいは開始線に戻らねばならない。精神に半永久的な失調をきたす可能性のある技術や、対手のみならず周囲を巻き込むような現象も反則とされている。

その他、人体を裁断したり爆裂させたりといった、あまりにも危険で凄惨を極める技術を行使した場合には、即刻に破門を言い渡される。

それらの枷を外された状態の恣者を、あの稽古のような安易さで制圧できるとは、とても思えなかったのだ。

「しかしそれは、あくまでルールを設けた試合の話ですよね」

あえて挑発する意図で、語尾から息を抜きながら言う。こうした微妙な揺さぶりも、聴取の際には役に立つ。特にサイコメトリーを持つマホリにとっては、重要な判断材料であった。

だが弘兼は動じる素振りさえなく、ますます気を良くしたように笑うばかりだった。

「そうですねえ。実はそういうこと、よく言われます。しかし制圧することは不可能ではないんですよ」

天羽根流が世界的に広がりつつあるとはいえ、まだまだ知られていないところもある。そのため、単に貴族や資産家の間で流行っている健康体操、と分かりやすく面罵されることもある。それを思え

ばマホリの聞き方は、むしろよく気を回してもらった言い様だった。
「でもまさか、一応は指導している人にそれを言われるとはなあ……」
こりこりと鼻を掻く弘兼は、今さら気がついたように顔を上げた。
「これってもしかして、事情聴取というやつですか？」
「いえいえ、先生。そういうのではないんですよ。あくまで先生のご意見を伺いたくて――」
「はい。そう思っていただいて構いません」
少々慌てた様子で亜砂が否定するのを、マホリが切って落とす形で肯定した。その様子に、亜砂が眉間を押さえて首を振る。
とかくマホリは他人に対して、このように挑発的な言動を取る。彼女が言うには、偏に相手の精神を揺さぶり、捜査に役立つ情報を引き出すのが目的ということなのだが、亜砂に言わせれば自身の能力に裏打ちされた倨傲（きょごう）の現れでしかない。

恣者の持つ能力が、その者の精神を形作るのに多大な影響を及ぼすことは少なくない。魔術師であれば一般人よりも世界に対する知識を深く有し、それが驕りとして現れる。獣人であれば、ある種の野性味を帯びることもしばしばだ。
マホリは幼少のころより高精度のサイコメトリーを発現させており、周囲から将来を有望されていた。警察の養成学校での成績は常に上位を保ち、鳴り物入りで本庁に配属されたという。
それがどうやらサイコメトリーの食い違いから捜査のミスリードを招いてしまい、西八王子署へと左遷されてしまったのだ。
手柄を立てねばならないという焦りと、サイコメトリーへの執着にも似た自信が、マホリにこのような行動を取らせるのだろう。
今のところは実際に情報を収集する上で役に立っているし、マホリが勝手にやっていることなので、亜砂も強くは止めようとしない。一応は形ばかりの忠告を促し、相棒として最低限の格好をつけるだけだ。

「そうですか。まあ、何なりと聞いてください。警察への協力は市民の義務なので」
「それでは、訓練された獣人を人間でも倒せると先生は仰っられましたが、それはあくまで試合上のルールに則ってのことですよね」
「いいえ、そんなことはありませんよ。普通の人間であれ、警察や軍でも活躍されているじゃないですか。そういった方々の多くに天羽根流はご愛顧いただいておりますよ」
「獣人二人に対し、素手の人間一人だとしても、ですか？」
「数や装備の問題ではありません。要は心構え、心身の充溢こそ臨戦にて試されるのです」
「分かりました。では質問を変えます。先生が獣人二人を二分以内に殺すとすれば、どのような手段を取りますか？」
「……殺す？」
途端、弘兼の眉根が見る間に下がっていく。困ったような情けない表情をして、「そういうことでしたら、我が天羽根流では行なっていません。他を当たってください」と、いかにも憤然とした様子でマホリに言った。

「我が天羽根流は、相手の殺害を至上目的とするような古めかしい武術体系とは一線を画するものです。極論すれば、武術ですらありません。中興の祖である我が師匠の苑朗が唱えた、武による相互理解と融和のためのツールなのです」
先ほどまでのにこやかさを僅かに削ぎ、弘兼は抑揚を欠いた調子で続ける。
「そのように思われていたこと。それ自体、私の功罪でしょう。まだ若輩ゆえ、至らぬところがあるのは自覚しております。ですが、天羽根流を単なる人殺しの技として見られることは、耐えられません」
「あ、いや、先生、決してそのようなことはありません。言葉の綾でして」

亜砂が弁明するなか、マホリは平然と弘兼の言葉を聞き流している。武による相互理解と調和。その結果として日本は恣者と人間とが分け隔てなく暮らしている。まるでそれを一身に担ったかのような弘兼の言い分は、彼女にとって胡散臭い代物でしかない。

このまま問答を繰り返しても埒は明かないだろう。弘兼はあくまで天羽根流師範という立場からの言葉しか吐いてくれない。

「先生、最後に、これを見ていただけますか？」

そういって取り出された写真を、弘兼が覗き込む。すると、諌めるときもにこやかな表情を崩さなかった彼の顔が、引きつり上がっていく。

そこに映っていたのは、獣人のボディガード二人とサッラームの死体だった。

「マホリ！」

思わず叫んだ亜砂が、マホリの手の中にあった写真をむしり取る。

「すみません、先生。このお詫びはまた後日。本当にすみません」

平謝りを繰り返し、亜砂はマホリを引き連れる形で逃げるように道場を後にした。

七

車に乗り込むと、亜砂はまたもマホリを諌める。
「何考えてるんだ！　一般人にあんな写真を見せて、迂闊にも程があるぞ」
「一般人じゃないわ。弘兼先生は逮捕術の指導もやってるんだから、十分に警察関係者よ」
「だとしても、捜査資料をおいそれと見せるなんて。それに先生が精神的ショックを受けたとか言ってきたらどうするんだ？　言い逃れできないぞ」
「そんなこと言い出さないわよ。彼、一応は武術家なのよ」
世界的に発展しつつある流派の師範を掴まえて、一応などと前置きをつける辺り、マホリの性情が滲み出ていた。
「武術家が死体を怖がった、なんて話を公にすると思う？　あの人は計算高いから、そういう分別はちゃんと心得てる」
亜砂はどことなく、マホリの言葉が深く透けていくような気がした。その奥行きは、一体どこから来るのだろうか。

「お前、サイコメトリーしたのか？」
亜砂が聞くと、マホリはきゅうっと片頬だけ吊り上げた。底意地の悪く、見る者の心を隅々まで眇めたとでも言わんばかりの顔つきは、サイコメトラーなどが類する探査・調査に特化した恣者に特有の笑い方だ。
「空気。いいえ、雰囲気をサイコメトリーしたのよ」
マホリは厚手の皮手袋を装着した自分の手を、矯めつ眇めつしている。
この手袋は、マホリような高位のサイコメトラーや接触魔術、或いは感染魔術を得意とする魔術師の社会的信用であり責任であった。
恣者の中には、自身で能力や技術を制御できないケースがある。

それが社会秩序を脅かすほどのレベルであると認定されれば、当然ながら色々な制約を受けることとなる。
日本ではそうした例は少ないが、諸外国では刑罰まで課せられるケースも存在する。それほどに無軌道で制御不可能な恣者というのは、危険極まりない存在なのだ。

だからといってマホリが、未熟な超能力者であるということではない。彼女の場合は疑わしきを行なわないという、一種の社会的責任なのだ。彼女がこの手袋を外していいのは、警察業務の場面に限られている。
高位のサイコメトラーが素手で歩くということは、触れるもの全てからあらゆる情報を取り出せるということだ。マホリがその気になれば、プライバシーや機密など有名無実と化す。
警察に属する者が、まさか社会秩序を乱すわけにはいかない。そのために能力を遮断する特殊な素材で作られた手袋を嵌め、常日頃はサイコメトリーを制限している。
「写真を見せたときの感情は、面白かった」
「お前、触ってないだろ……」
「私くらいの能力者なら、出来て当然」
事も無げに言ってのけるマホリに、亜砂は冷や汗を禁じ得なかった。
サイコメトリーは主に手で行なわれる。そこから離れたり、間に物があるほど、サイコメトリーの成功率や精度は下がっていく。
ならば能力を遮断する手袋をしつつ、相手に接触もせず行なわれるサイコメトリーの成功率や精度は、どうなるのだろうか。
「だけど、読み切れなかった。やっぱり直接触らないとだめね」
その声に、残念そうな色はない。むしろ喜色を湛えた愉悦の声だ。
「誰か、特定の人間を思い浮かべてたみたい。そいつに対しての感情が、複雑に入り乱れてた」

「そんな曖昧なサイコメトリーじゃ、証拠能力は無いぞ」
とはいえ、これ以上ない悪条件下で行なったサイコメトリーであることを踏まえれば、途方も無い成果であった。それはマホリ自身も十分に心得ている。
「もしかしたら門下生に、そうした技術を求めた人間がいただけかもしれない」
「ならそいつを追う。現場のサイコメトリーと弘兼先生への聴取、またやるわよ。次はきちんと令状を持ってね。それなら文句はないでしょう」
「ああ、文句無い。ついでに迷惑もかからない」
くふりと、マホリは一指し笑う。諫言を呈する相棒の底を、浚ったような気がしたのだ。
何だかんだと言いつつも、亜砂はマホリと敵対しようとはしない。彼が自分のサイコメトリーを当てにしていることさえ、彼女はおぼろげながらにサイコメトリー出来ているのだ。
「今ごろ他の連中は、どういう捜査をしてるかな？」
「サッラーム大臣はアフリカでの人間と恣者の融和を進めていたから、その辺りの利害関係から洗うんじゃないかしら」
「てことは何か？　殺し屋がいたかどうかってことか。今どき古風だ」
「確かに。素手の殺し屋なんて、格調が高すぎる」
マホリはぐるりと首を巡らし、運転中の亜砂を無遠慮に覗き込んでくる。

「大丈夫よ。彼らは私の報告なんて気にも留めない。犯人が素手であることを認められないから、彼らは犯人に近づきはすれど辿りつけない」
「別に、そんな心配はしてない」
「私は心配しているわ。誰かに手柄を横取りされないかと思うと、気が気じゃないの」

抜け抜けと言ってのけるマホリには、もちろん焦りの色などない。彼女は一度サイコメトリーに失敗し、出世のコースを大きく外れはしたものの、未だに自分の持つサイコメトリーを信じている。そんな彼女にとって今回の事件は、手柄を立てる格好の的なのだろう。

亜砂とてそうした功名心を抱いていないわけではない。ただそれを人前で出すほど、素直な性情をしていないだけである。

「私は自分の能力を、きちんと信じているのよ。あなたはそれに乗っかればいい。せいぜい良い目を見れるよう、私を手伝いなさい」

あまりにも直截的な言い様に亜砂が鼻白んだものの、言い返す言葉を持たないのも事実だった。

八

篠突く雨に気づいたのは、いつだろうか。

漠として広い道場に、弘兼は立ち尽くしていた。そそくさと退散したマホリたちを見届けたままの姿で。

喉を引き千切られた男。腹に穴の開いた男。首の捩じくれた女。その全てが目に焼きついてはなれない。男二人に対しては一撃にて決着している。恐らく、大臣の喉を懐に入ると同時に指で潰し、離れ様に千切ったのだろう。失血性のショックと窒息とで、何れ死ぬことになる。

そして男のほうは変身するタイプの獣人。この手の獣人は、人から獣へと形態を変える数瞬、体の構造が非常に脆くなる。その寸毫は、恣者の中でも強靭な体を持つ獣人と言えども、蛹の中身の如くに柔く脆い。

そのタイミングを知り得るのは、恣者に対抗する術を極めた者のみだ。

さらに猫女には、より明確な技術が用いられている。

「あれは、あの技は……」

捩れた首、血の流す頭頂部の耳。弘兼はその現象を見たことがあった。師の声とともに古い記憶が呼び起こさて、弘兼の頭に満ち充ちる。

『獣人の中には猫や犬のように、頭頂に二つの耳を持つ者がおる。そこへ指の差し入れつつ頭を掴めば、絶好の攻撃位置と隙を生み出せる』

同じだ。そうやって師匠も、獣人の耳に、指を入れていた。血を流すほど耳孔を深く抉られた獣人は、痺れるように震えて声も出せなかった。

『あとは首を挫くなりして、とどめを刺せばよい。これぞ天羽根流

――』

ようやく吐き気として現れた回想を、弘兼は飲み下した。

「――猫頭（びょうどう）、抱え」

あの技を知っているのは、今やこの世で二人。そして使えるのは、恐らく一人。

「延冶（のべや）……」

天羽根流前師範である苑朗（えんろう）には、一人息子がいた。その名を延冶という。本来、彼こそが苑朗の跡を継ぎ、師範となるはずだった。

延冶は苑朗と同じく、飛騨山中にて遭難し、そのまま行方不明となった。とっくに死亡したものとして扱われ、天羽根流門下でも彼のことを知るものは少ない。

弘兼は延冶を知る一人であり、さらにはその生存を確信している唯一の人間でもあった。

弘兼はいつの間にやら、手で口元を押さえている。荒い鼻息が手に篭って、生暖かい。

弘兼は猫頭抱えを使えない。知ってはいるし、習いもしたが、使えはしない。使いたくもない。目にしたくもないし、関わりたくもない。

それも紛れ間もない、天羽根流だから――

「くううう、うう……」

歯を軋らせて妙な声を上げながら、弘兼は構えていた。柔よく剛を制す。超能力や魔術をも制する柔法の集大成、円（つぶら）の型。胸元に描く球をもって受け完全とする。

天羽根の技は、調和と秩序の御業。恣者と人とを繋ぐ架け橋となるべく研鑽された技。決して殺傷を目的とするものではない。

自然と、左手が前に出る。面打ちから前襟を取り、右足を出しつつの右中段肘打ち。さらに背を押し付けて崩し、奥襟を掴んだ左手で背負いあげる。仮想の敵が取る受身の音まで、弘兼の耳に届く。

さらに相手は後方から襲う。振り返る力に逆らわず、相手の突きを右の腕刀で払い様に切り落とし、なおかつこちらの脇に挟み、右手刀で相手の脇を打つ。ここまでが、振り返る一動作である。

挟み込んだ腕を引き込み、前方へ崩す。当然、相手は倒されまいとして後ろに重心を戻そうとする。そこを左手で押してやれば、相手は腕を極められたまま倒れることになる。あとは腕を完全に折るか、もう一度左手で一撃してやれば決着だ。

天羽根流投撃の浮橋から、複合当身の斬腰（ざんよう）。物心ついた時分から幾千幾万と繰り返し、もはや血肉に備わった技術。備わっているのだと思いたい技術。備えなければならない技術。

誰よりも、この世の誰よりも天羽根流を身につけなければならない。それが天羽根流の師範たる自分の役目だ。

今のところ、その面目は保たれてる。天羽根流のルールに則れば、門下の者に弘兼を脅かす者はいない。齢二十八でそれほどの力を身に付けていたからこそ、若くして彼は天羽根流師範に選ばれたのだ。

というのはあくまで表の、口当たりの良い事情でしかない。実際には弘兼よりも昔から天羽根流の門下で、実力も上回っている人間はいる。巨瀬野などはまさにそういう兄弟子である。しかし弘兼以上の門下というと、皆年を取ってしまっていた。そこで下の者を引っ張っていけるだけの活力を持ち、年相応の責任感を帯び、さらには師の苑朗が自ら引き取って手解きをし、もはや息子も同然の扱いを受けていたことから、弘兼が選ばれたのだ。

そして天羽根流の根拠地である日本に弘兼を置き、他の門下は普及のため、世界中の支部へと配属された。

要は、祭り上げられたのだ。天羽根流という神輿の上で、自分は騒ぎ続けなければならない。

それが自分と武の神とで交わした約定なのだ。孤児から人並みに育てられ、ここまで上り詰めた自分の、違えられぬ宿業なのだ。

九

何も嫌なもんか。自分の好きなこととして生きていける。こんなに素晴らしいことはない。

流麗に型を紡ぐ自分の指を、うっとり眺めている。結局のところ縋れるのは、この身一つに宿った天羽根流なのだ。自分が習った、自分が解釈した、自分だけの天羽根流なのだ。

何て、卑しい。こんな僅かで短い慰めの、どこに救いがあるのか。そしてこの作業に、どれだけ救われてきたことか。

こんなことを、弘兼は幾度も繰り返してきた。夢見に襲う記憶――明確な敗北の手触りから逃れるように。

目の前にぼんやりと浮かぶその姿は、紛れも無く弘兼の弟弟子、延治であった。以前に記憶したままに彼の脳が再生し、実感を伴うほどリアリティで再現する。

延治が取る構えは、尖（とがり）の型。体は真半身に近く、やや屈んで重心を前に出し、左手を中段から前に置く。右手は顎を庇う形で軽く握る。

先鋭的な遊撃の構え。そこから紡がれる天羽根流は、弘兼のものとは似ても似つかない。それは嫌というほど思い知らされ、目に焼きついている。飛騨の山奥で、行方不明になった延治が見せた構え。

苑朗が手ずから込めた、真性の――

縦揺れのリズムから、いきなり突き出される股間狙いの前蹴り。それを斜めに引きながら右で叩き落とす。

落とされた右足を戻さず、今度は腰を返して足の甲を踏みに来た。そのときには既に左のジャブが飛んで来ている。

弘兼が右手で弾くと、すぐに延治の右手が放たれる。ワンツーのコンビネーションを左手で捌き、弘兼は足を入れ替えて後ろに下がった。

その目の前を、延治の右踵が過ぎる。天羽根流腿術、片輪蹴り。下段回し蹴りから上段後ろ回しへと繋ぐ。足を入れ替えて左足を後ろに下げなかったら、後ろ回し蹴りの前に放たれた下段回し蹴りで払われていた。

間髪いれず襲う怒涛の攻め。もはや魂に刻まれるほど繰り返した夢見の立ち合い。

かつて飛騨の森のなか、針葉樹に見守られながら行なわれた立ち合いで、弘兼は最初のワンツーを防ぎきれず、その後の下段蹴りで脹脛を打たれ、それに気が行って下を向いた顔面を、右の踵で引っこ抜かれた。

だが、此処から先は、違っている。

足を組み替え、左構えとなった弘兼が、低く飛び出す。ぬるりと滑るような足運びは、八卦掌の沼泥歩や日本武道における無足の応用である。それを迎え撃つ形で弘兼は右手を低空に置き、喉許を抉るような軌道で放つ。

延治は拳面で掬い打ちの手首を打って防ぎ、そのまま肘を立てて顔面にねじ込んできた。天羽根流の基本的な当身である乙（きのと）は、一振りにて二度打つ術理である。主に逆捕の補助――先掛けや中掛けとして使用する。特に一手目で相手の技を防ぎつつ打つのは塞乙（さえきのと）と称する。

側頭に向かい来る肘を左手で押さえ、さらに先ほど打たれた右手は延治の左手首を捕獲していた。

迎撃される瞬間にこちらから掴み寄せ、ぐっと下に引き込んで背をぶち当てる。相手の体を崩し、こちらが踏み込んでの攻め、優位な攻撃位置を確保する。

ぶつかられ、不安定になった延治を、弘兼はそのまま真上に引っこ抜く。いわゆる一本背負いの形だ。

後頭部を肘で打ち抜かれた衝撃に、弘兼の体がびくりと跳ねる。幻の衝撃が、脳天まで貫いてくれる。

腕を担ぎ、背負い、投げるまでの刹那。後ろを向いた弘兼の延髄に、延冶は肘打ちをかましたのだ。そうまでする。それが出来るという確信が、弘兼の中にはあった。

姿勢の崩れた弘兼の背を蹴って、延冶が跳び退る。そしてもう一度、尖の型を取った。最初に対峙したときと同じ構図である。

『これが、本当の天羽根流だ』

耳朶に、自分のものではない声が響く。自分以外に誰もいない道場に響くそれは、明らかな幻聴である。

ああ、と、弘兼は嘆息する思いだった。

同じことを、飛騨の山でも言われたものだ。本当は倒れ伏せた上から浴びせられたものだった。

「……武による調和こそ、天羽根流だ」

これも以前の立ち合いの再現だ。弘兼は地面に突っ伏したまま、首だけを向けて言ったのだ。

『それは、単なる一面。武の一面に過ぎない。弘兄いは、それだけで満足なのか？』

弘兼は、答えられない。今も昔も、その通りだと腑に落ちる自分と、そうではないと退けようとする自分とが、背反して身動き一つ取れない。

延冶がすうっと薄れるように構えを解き、その姿さえ消え入ってしまう。最後に目にした姿――飛騨の樹間に埋もれていった姿が、再現されている。

『なら、俺が本当の天羽根流を継ぐ。弘兄いは、守ってくれるだけでいいよ』

勝ち負けを論ずるのなら、弘兼はあの時、完全に敗北していた。戦いにすら、ならなかったのだ。

抵抗もせず、受け入れもせず、ただまんじりと事態が自分を通り過ぎていくのを待っていただけだった。

そして気がついてみれば、何かも背負い込んだままになってしま

っていた。何も消えてくれたり、解決してくれることはなかった。そのままずるずると、延治の影を引き摺っている。

そして彼に言われたとおり、天羽根流を守り、拡げていった。世界中に支部を置き、競技化を進めて万人に受け入れられる体制を整えた。

別段、延治の言葉を真に受けたわけではない。ただ、自分の考える天羽根流を体現すると、こうなっていったのだ。

武による調和と秩序。恣者と人間との融和。それこそが天羽根流の目指すものなのだと、弘兼は信仰し続けている。

師の息子に叩きのめされても、それしか信じられないのだ。

「若先生、そろそろ時間だ。行こう」

巨瀬野が呼びに来たの受けて、はたと弘兼は気がついた。

「ああ。そういえば今日は、食事会でしたね」

今日は門下である資産家が開いてくれる食事会に、弘兼や巨瀬野の天羽根流中目録の者たちが招待されていた。

天羽根流は警察への訓練だけでなく、広く門扉を開いている。その中には資産家や政治家などの上流階級の人も多い。今日はその方たちの集まり、要するに社交会に呼ばれているのだ。

こうした集まりは、弘兼もこれまで訪れたことがあった。人間国宝だった苑朗に連れられて、である。無論、それには天羽根流を売り込むという意味合いもあった。

だからかもしれないが、弘兼はそういった集まりを好きにはなれなかった。

理由はとっくに知れている。他ならぬ自分のことだ。それはよく承知している。

自分は孤児だから。親無しだから。本当の息子ではないから。そんなことをどうしようもなく、突きつけられるのだ。

だからこそ、行く価値がある。

こんなことは誰にも出来ない。天羽根流師範である自分にしか負

えない役目なのだ。死んだ苑朗にも、いなくなった延治にも、誰にも出来やしないのだ。

今や天羽根流を支え、守り、拡げているのは、確実に弘兼の功績であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3828x/

恣を討つ者

2011年11月17日03時24分発行